レポート

地域総力戦によるまちおこし
― 南九州市頴娃（えい）町 ―

はじめに

薩摩半島の南端に位置し、南部は東シナ海に面する鹿児島県南西部の南九州市頴娃町（図表１）。近隣に特攻平和会館や武家屋敷がある知覧町と、砂風呂で有名な指宿市という２大観光地があるため、頴娃町は目立たない通過地域であり、近年は人口の減少と少子高齢化が進行し、町の活気が失われつつあった。

図表１　南九州市頴娃町の位置

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

立地条件もあって町の活性化は非常に困難だと思われていたが、地元のまちおこし団体「NPO法人頴娃おこそ会」の活動が、2014年９月に総務省と全国過疎地域自立促進連盟が主催する平成26年度過疎地域自立活性化優良事例の総務大臣賞を受賞するまでになった。

今回は、『地域総力戦によるまちおこし』を標榜するNPO法人頴娃おこそ会による過疎地域活性化の取組みを紹介する。

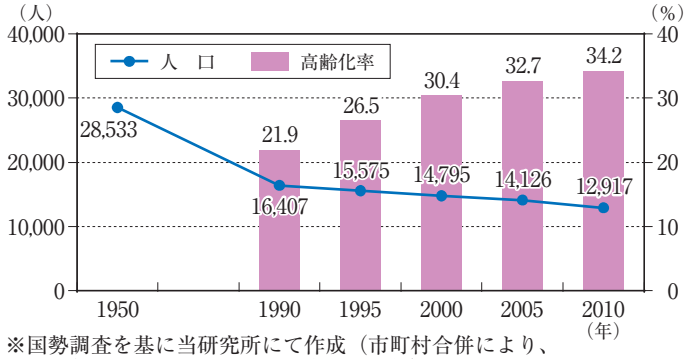
Ⅰ．頴娃町について

頴娃町のあゆみをみると、1889年の町村制施行により頴娃郡頴娃村が発足、1896年には頴娃郡が揖宿（いぶすき）郡に編入され揖宿郡頴娃村となり、1950年の町制施行で揖宿郡頴娃町となった。いわゆる平成の大合併により2007年12月、周辺の川辺郡川辺町・知覧町と合併して現在の南九州市頴娃町が誕生した。

町の人口は、1950年の約29千人をピークに減り続けており、現在では約13千人となっている。また、高齢者の人口は増加傾向にあり、高齢化率は３割を超える（図表２）。

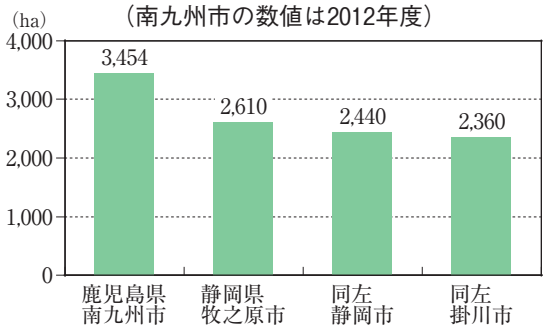
町の基幹産業は茶業で、「頴娃茶」（今後「知覧茶」に銘柄統一の予定）の産地である。お茶の栽培面積・生産量ともに全国第２位の鹿児島県で、主要産地として知られている旧頴娃町と旧知

図表２　頴娃町の人口と高齢化率



※国勢調査を基に当研究所にて作成（市町村合併により、2010年の高齢化率は南九州市全体の数値）

図表３　2011年度市町村別茶園面積
（南九州市の数値は2012年度）



※南九州市発刊「南九州市の茶業」を基に当研究所にて作成

覧町が合併して誕生した自治体・南九州市は、わが国で最も茶栽培面積が広い市町村である（図表３）。なかでも、旧頴娃町の第１次産業への就業割合は市内で最も高く、茶業が活発な土地柄であることを示している（図表４）。

図表４　産業部門別の就業者数

（人、%）

		南九州市（2010年）			
			旧頴娃町	旧知覧町	旧川辺町
総数		18,116	6,509	5,563	6,044
第１次産業		4,551	2,457	1,298	796
	農業・林業	4,501	2,423	1,285	793
	（うち、農業）	(4,437)	(2,402)	(1,269)	(766)
第２次産業		3,827	980	1,177	1,670
	建設業	1,388	368	395	625
	製造業	2,432	608	780	1,044
第３次産業		9,689	3,064	3,068	3,557
	運輸業	618	206	225	187
	卸売・小売業	2,311	698	681	932
	宿泊・飲食サービス業	733	228	247	258
	医療・福祉	2,509	905	636	968
構成比	第１次産業	25.1	37.7	23.3	13.2
	第２次産業	21.1	15.1	21.2	27.6
	第３次産業	53.5	47.1	55.2	58.9

※2010年国勢調査を基に当研究所にて作成

Ⅱ．NPO法人頴娃おこそ会

これまで“通過地域”とされていた頴娃町は、今では旅行雑誌に掲載される町へと変貌している。ここまで地域の魅力を引き上げてきたのが、「NPO法人頴娃おこそ会」（理事長：西村正幸氏）による諸活動である。

旅行雑誌「るるぶ」へ初掲載される（2011年）

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

1．発足経緯

おこそ会のルーツは、旧揖宿郡頴娃町時代から行われている祭りの運営を手伝っていた商工会青年部や農協青年部などにまで遡る（図表５）。

図表５　「NPO法人頴娃おこそ会」発足までの道のり

年	で　き　ご　と
旧揖宿郡時代	町の一大イベント『えいのゴッソイ（「全部の」という意味）まつり』の運営を手伝っていた商工会青年部や農協青年部など町内4団体が、他にも何か行動を起こそうと、団体の垣根を越えた新たなまちおこし団体「寄せ鍋クラブ」を結成。
2004年	「おこそ会」結成の動きが現れる。 商工会員と町役場の職員が、まちづくりの先進事例として大分県竹田市を視察。
2005年	任意団体「頴娃おこそ会」を設立
2007年	「頴娃おこそ会」をNPO法人化

※ヒヤリングを基に当研究所にて作成

（1）「頴娃おこそ会」の発足

2004年、商工会まちおこし委員会から「町は小売店の廃業が相次ぎ、跡継ぎもいない。人口の減少と進行する高齢化により地域が疲弊してきている。このままではいずれ商工会も存続できなくなる上に、地域の存在まで危うくなる。商工会だけのまちおこし活動には限界があり、寄せ鍋クラブのように関係各所から人材を集めたまちおこし専門の組織をつくるべき」との話がでた。

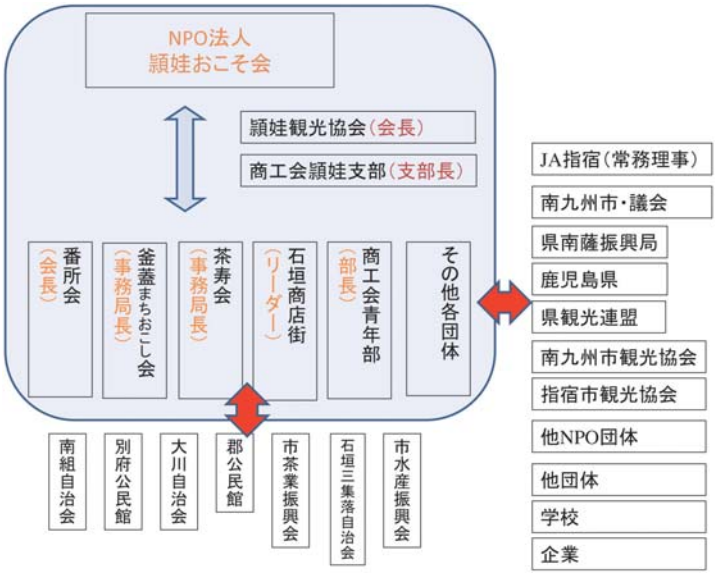
そこで、まちおこし新組織の発足に向けて、商工会員が当時の町役場職員らと共に、大分県竹田市で官民一体のまちおこし活動を行っているグループ「竹田研究所」を視察し、そのコンセプトを頴娃町に導入した任意団体「頴娃おこそ会」（メンバー25名）を翌2005年２月に設立した。その後、2007年に市町村合併で南九州市となる行政などと共に活動しやすいよう、NPO法人化し、メンバーも44名に拡大した。

（2）おこそ会の特徴

頴娃おこそ会は、町内まちおこし関係者のネットワークの要の役割を担っており、会を起点として商工会や農協・行政など比較的大きな組織や町内各地域のまちおこし団体と手を携える『地域総力戦によるまちおこし』を展開している。図表６に記載の「釜蓋まちおこし会」「茶寿会」といった町内各地区の組織は、おこそ会の呼びかけにより誕生したまちおこし組織である。

各地域組織のリーダーがおこそ会メ

図表６　頴娃町『地域総力戦 によるまちおこし』



※提供：NPO法人頴娃おこそ会

ンバーであり、また、他にも旧揖宿郡頴娃町時代からのまちおこし仲間で、現在は南九州市の市議会議員や農協の常務、観光協会の会長や商工会の支部長なども所属しており、地域に対してリーダシップを発揮できる体制が整えられている。

２．活動方法

おこそ会では、プロジェクト提案制を採用しており、会員であれば誰でもまちおこしに関する提案権を持ち、提案が採択されると会員を中心とした専門チームが編成される。

実績をみると、「美術展に頴娃町を描く絵手紙部門を設置して、町外の人から頴娃の町を描いてもらい、外の視点でみた町の良さを新たに発見するプロジェクト」「民泊を受け入れるグリーンツーリズムプロジェクト」「芋焼酎をつくるプロジェクト」などを行い、焼酎のプロジェクトでは、おこそ会メンバーの農家が自分の畑を開放し、植え付けから収穫までメンバーの手で行った芋のみを使用した焼酎を開発している。

おこそ会が手がけているさまざまなプロジェクトは“観光”というキーワードで繋がっている。観光関連のプロジェクトについては、Ｉターン者の加藤潤氏を中心として行われており、Ⅲ章で詳述する。

３．活動財源

おこそ会の活動財源は、会費や観光協会など各種団体からの協賛金に加え、自主開発した焼酎の販売数に応じたマージン収入など自らのプロジェクトからの収益によるが、公園整備など大規模な事案については県や市に提案を行い、行政直轄事業として実施している。

４．活動効果

頴娃町には町外からの来訪者が少なく、観光統計がなかったため、おこそ会では来訪者数を把握することにした。その結果が図表７である。

当初、おこそ会の活動は住民に理解してもらえなかったが、町に人が集まってくる光景を目の辺りにして、その活動に賛同する人も現れてきている。最近では会の活動に刺激を受けて、これまで特に動きがなかった町内一の繁華街・三俣（みまた）地区にておこそ会主催によるまちおこし会議が開催された。おこそ会では、会議をあと２、３回開催することで、当地区におけるまちおこしのモチベーションを確実に高めることができるものと確信

図表７　頴娃町訪問者数

年	来　訪　者　数
2010年	◇８月：釜蓋神社　10,000人 番所鼻　5,000人
2011年	・釜蓋神社で年間約８万人と推計
2012年	◇１月：釜蓋神社　25,000人 番所鼻　11,000人 ◇８月：釜蓋神社　30,000人 番所鼻　10,000人
2013年	・タツノオトシゴハウスの入館者数が累計10万人を突破 ・釜蓋神社で年間約15万人と推計

※NPO法人頴娃おこそ会の資料を基に当研究所にて作成

している。このように、まちおこしの機運が頴娃町全域に広がってきている。

５．活動の継続

全国各地のまちおこし活動のなかには一過性に終わるものも多く、地域への危機感だけでは長続きしない場合も多い。そこでおこそ会では、メンバー自身がまちおこしを楽しいと感じることで、訪れる人も楽しいと思ってもらえるとの考え方に基づいて活動している。

まちおこしでは、まちおこし組織の活動内容を地元住民に伝える仕組みを作ることに成功した地域が成功している。おこそ会も、まちおこしの火付け役・きっかけを作る組織として、今後頴娃町はどうなるのか、どうしていくべきなのかを確認しながら、地元住民へ伝える役割を担っていきたいと考えている。

Ⅲ．通過地域から観光客が訪れる町へ

１．Ｉターン者の活用

今では頴娃町の定番観光スポットの１つとなった番所鼻（ばんどころばな）自然公園内に、2008年に開業したわが国唯一のタツノオトシゴ観光養殖場「タツノオトシゴハウス」がある。その施設を経営するシーホースウェイズ㈱の加藤潤専務は、埼玉県出身のいわゆるＩターン者でありながら、おこそ会の観光プロジェクトリーダーを任されている人物であり、頴娃町が観光地としての認知され始めたのは、彼のサラリーマン時代における商社勤務等の経験を生かした発想や、エネルギッシュな行動に負うところが大きい。

そもそも加藤氏は、実弟の紳氏が代表者を務めるシーホースウェイズ㈱の経営に参加するために2010年、家族とともに頴娃町に移住したのであり、町の観光を手掛けるためではなかった。ところが、当初は物珍しさからの来訪者も多かったタツノオトシゴハウスの経営が不安定であったことから「地域全体が観光地にならないと今後もハウスへの継続した集客は難しい。通過地域だといわれる頴娃のまちづくりから始めないといけない」という思いに駆られておこそ会を通じた活動に力を入れることになった。頴娃町出身ではない加藤氏を地元にはいない人材と見抜き、観光プロジェクトリーダーを任せたおこそ会の西村理事長の目は、加藤氏のその後の活躍をみると確かであった。

２．観光地「頴娃町」の誕生

おこそ会は、2010年の西村理事長自身の発案による番所鼻自然公園内へのシンボルの設置以降、加藤氏をリーダーとして次々と頴娃町観光地化への取組みを活発化させていった（図表８）。

図表８　頴娃町の観光地へのあゆみ

年	で　き　ご　と
2010年	・番所鼻自然公園内のシンボル「竜のおとし子～吉鐘～」が落成 ・全国的にパワースポットがブーム。番所鼻と釜蓋神社を紹介したパワースポットマップを作成 ・地元マスコミに両スポットの特集記事・会の活動が認められ、鹿児島県による番所鼻自然公園の再整備が決定
2011年	・番所鼻自然公園が再整備される ・「茶寿会」が結成 ・「釜蓋まちおこし会」が結成 ・テレビ朝日「ナニコレ珍百景」にて釜蓋神社が紹介される ・ボランティアガイド組織（４名）の発足 ・初となる頴娃町のみを巡る旅行ツアーの実現・大手旅行雑誌「るるぶ鹿児島」に番所と釜蓋が掲載 ・鹿児島県による大野岳の再整備が決定
2012年	・辰年効果もあり、タツノオトシゴハウスへの来客数が急増 ・釜蓋神社へ正月３日間に約5,000人の人出 ・大野岳が再整備される ・手作りマップ「えい日和」初版が完成 ・第１回「ばんどころ絶景祭り」を開催、2,000人の人出 ・町内飲食店において、観光客相手にお茶関連のメニュー開発が始まる ・なでしこJAPANのMF澤穂希とGK福元美穂が釜蓋神社を参拝 ・鹿児島県知事自らが頴娃町におけるまちおこしのようすを視察、関係者と意見交換
2013年	・釜蓋神社に正月３日間で約19,000人の人出、頴娃の町に交通渋滞が発生 ・手作りマップ「えい日和」第２版が完成 ・お茶を巡るツアー「グリーン・ティー・リズム」開始 ・番所鼻と釜蓋神社を結ぶ散策路「頴娃シーホーウォーク」を開設 ・第２回「ばんどころ絶景祭り」。3,300人の人出 ・釜蓋神社にバス駐車場を設置、観光バスによる来訪が可能となる ・お茶関連のメニュー開発を町内各飲食店より商工会青年部へ引き継ぎ ・各地より頴娃町への視察が増加 ・旧商業地区・石垣地区にて「石垣プロジェクト」始動
2014年	・正月に釜蓋神社だけでなく、大野岳にも観光客 ・「番釜海岸魅力掘り起こし会議」「石垣商店街会議」の開催 ・鹿児島県により、番所鼻と釜蓋にトイレを新設 ・NHK「鶴瓶の家族に乾杯」にて石垣地区が紹介される ・手作りマップ「えい日和」最新版が完成 ・過疎地域自立活性化優良事例の総務大臣賞を受賞 ・町内一の繁華街・三俣地区にて初のまちおこし会議を開催 ・茶寿会とのコラボにて市職員や農業関係者へ講演

※NPO法人頴娃おこそ会からの資料・ヒヤリングを基に当研究所にて作成

（１）番所鼻自然公園

番所鼻自然公園は、後述する釜蓋神社とともに頴娃町観光の定番スポットである。この地は、日本地図作製のために立ち寄った伊能忠敬が「天下の絶景」として称賛した景勝地だが、近隣には著名な長崎鼻などがあり、人が立ち寄らない雑草に覆われた場所となっていた。

2010年、おこそ会はこの景勝地を観光地として復活させるべく、周辺の海がタツノオトシゴの生息地であり、また、前述した加藤兄弟の「タツノオトシゴハウス」も公園内に立地していることから「番所鼻自然公園内にタツノオトシゴの鐘を作るプロジェクト」を始動、資材調達から設置までメンバーの手によるタツノオトシゴの夫婦愛をモチーフにした『竜のおとし子～吉鐘～』を建立した。これが雑誌などに採り上げられるなどして来訪者が急増、おこそ会もメディアに採

り上げられ始めた。おこそ会の観光によるまちおこし活動の起点となったのが、この活動といえよう。

おこそ会メンバーによる建立のようす

完成した『竜のおとし子～吉鐘～』

※写真提供：NPO法人頴娃おこそ会

このおこそ会の積極的な活動を契機に、鹿児島県が番所鼻自然公園の再整備事業に着手し、翌11年に完成した。この出来事は、まちづくりにおけるおこそ会の求心力が増す要因となった。

木々が生い茂る整備前の番所鼻自然公園

整備後

※写真提供：NPO法人頴娃おこそ会

また、頴娃町には観光マップがなかったため、観光客目線で作製した手作りマップ「えい日和」を12年に発刊し、観光スポットだけの“点の観光”から観光スポットを周遊させる“面の観光”を創出した。その効果が現れ、現在では釜蓋神社を訪れた観光客が大野岳（後述）など他の観光地も訪れるようになっている。

『えい日和』を始め、地域や「食」の紹介などの手作りマップ

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

（2）釜蓋神社

釜蓋をかぶって参拝すると戦いから無事に帰って来られるなど、飛鳥時代より武の神様として崇められてきた釜蓋神社は、2010年の全国的なパワースポットブームのなか参拝客が増えつつあった。その様子をみたおこそ会では、番所鼻と釜蓋を紹介した手作りマップ「頴娃パワースポットマップ」を作成、それが地元のマスコミの目に留まり双方の特集記事が組まれることとなった。

頴娃パワースポットマップ

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

翌11年には、観光に関する問い合わせ（駐車場やトイレ、案内等）の増加に、神社をはじめ地元も対応しきれない状況が発生したことを踏まえ、住民や観光協会・行政を交えて話し合う「釜蓋まちおこし協議会」をおこそ会主導で開催した。この会合がきっかけとなり「釜蓋まちおこし会」が結成され、ボランティアガイド組織の発足、毎週日曜日の朝市開催など、神社を中心とし

なでしこJAPANの澤と福元の参拝を報じる新聞

にぎわう釜蓋神社

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

た釜蓋地区のまちおこし活動が始まった。

このようななか、2012年のオリンピックで銀メダルを獲得したなでしこJAPANの主力選手が、試合前に釜蓋神社を参拝していたことがわかり、一気に釜蓋地域の知名度が向上することとなった。そこで、翌13年には神社の側に常設売店を開設、スタッフを常駐させてグッズ販売を始めており、経済的恩恵も出てきている。

（3）大野岳

頴娃町のお茶の生産量は、市全体の生産量の５割以上を占めているが（図表９）、近年の茶業を取り巻く環境は厳しい。排水口に詰まるなどの理由でお茶の葉の使用を禁止するマンションの増加や、ペットボトルで代用することで急須を置かない家庭が増えるなど、その飲用スタイルの変化に加え、景気低迷による消費減も追い打ちを掛けている。

図表９　南九州市における頴娃町の生葉生産量

（ｔ）

年　　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013
南九州市全体	55,245	49,311	53,440	51,828	56,990	56,459
内、頴娃地区	28,234	26,055	28,101	26,956	29,961	28,914
頴娃地区のシェア	51.1%	52.8%	52.6%	52.0%	52.6%	51.2%

※「統計 南九州」を基に当研究所にて作成

そのようななか、主要産業であるお茶を活性化したい南九州市と、番所と釜蓋が賑わってきたことから次はどの地区のまちおこしを手掛けようかと考えていたおこそ会から、頴娃町のお茶処・大野岳地区の自治会に対して、2011年に地域活性化アイデア会の開催が持ちかけられた。そこに出席していた若手茶農家の上村夫妻から「大野岳からの景色は美しいが人は来ない。そこで茶寿（ちゃじゅ）※をコンセプトに大野岳近辺をお茶の山として売りだしてみてはどうか」との提案があった。この会合後、茶業界の盛り上げとお茶による地域おこしを目的とした茶農家によるまちおこし団体「茶寿会」が発足した。

※茶寿：108歳を祝う言葉。漢字の「茶」を分解すると108となる。

「茶寿」の意味

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

まず茶寿会は、県による大野岳の再整備について「“茶寿”にかけて約70段あった展望台までの階段を108段へ変更」「展望台は大野岳の高さ466mにかけて“しろろ展望台”と名付ける」など事業に関するアイデアを次々に提供、ついには県から大野岳再整備事業についてはまず茶寿会に相談するという流れを確立した。このように大野岳の整備は地域と行政が一体となった事業展開となり、翌12年に全てが完成している。また、おこそ会も当事業について茶寿会とともに整備作業を手伝い、案内板にはめ込む地図などを作成している。

展望台への階段（整備前は約70段）

整備後の階段（“茶寿”を意味する108段）

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

また茶寿会では、大野岳近辺を訪れるツアー客の案内を請け負っている（「グリーン・ティー・リズム」と名付けている）。この活動では、メンバーが「自分達はお茶農家の集まりであり、そもそも観光業に携わる気などなかったが、観光客へのお茶の振る舞いや茶摘採機試乗体験などを行うなかで、観光客が大変喜ぶ姿をみて、観光に携わるということのすばらしさを実感した」と語っている。

グリーン・ティー・リズムのようす

※提供：NPO法人頴娃おこそ会

（4）石垣地区

番所や釜蓋、大野岳でのまちおこしの動きが、古くは映画「男はつらいよ」シリーズのロケ地でもあり、その町の佇まいが監督の山田洋次氏を感動させた頴娃町の旧商業地区・石垣地区へも影響を与えはじめている。

2013年に地区内のマップ作りと散策コースを設定、案内看板の設置などを行い、翌14年には商

古民家の１つ「原田書店跡」

「原田書店跡」の説明板

店街会議を開催、古民家を改装して地域の交流拠点とする事業を始めるなど、その動きが活発化している。

Ⅳ．ツアーが訪れる町に変貌した頴娃町

おこそ会のまちおこし活動に関心を示したのが、薩摩半島で指宿・知覧以外の新たな旅行商品を模索していた大手旅行会社のJTB鹿児島支店である。2011年には頴娃町に担当者を派遣し、おこそ会から町内をくまなく案内、説明を受けた。その結果、初の頴娃町のみを巡るツアー「頴娃町まるごとツアー」が実現した。このツアーは、おこそ会にとって頴娃町への観光ツアー誘致を成功させるきっかけとなり、鹿児島県内の他地域から「どうしてJTBが頴娃町のみのツアーを組むのか」と驚かれている。おこそ会が大野岳のお茶農家も絡めるなど観光ツアーのコーディネートを直接行ったのもこれが初めてである。

現在ではクラブツーリズムをはじめ、複数の旅行会社から茶寿会などに対して直接コンタクトが来ており、シンガポールからのツアーの受け入れも行っている。

旅行会社主体のツアーでは、訪問各所で時間制限などが発生し訪問者がその土地の良さを感じる間もなく移動することが多いのに対し、頴娃町への旅行ツアーは、おこそ会が直接組んだコースが旅行会社に採用されており、例えば大野岳ではお茶を振る舞う時間を確保するなど、真の頴娃町の魅力を満喫できるコースとなっている。

Ⅴ．今後の課題など

１．茶園での観光客受け入れ体制

大野岳地区のまちおこし団体「茶寿会」による観光客対応は、本業の茶業もあることから、現在は旅行会社からのツアーのみにとどまっている。このため、例えば個人旅行者がふらりと訪ねても対応できない状態である。

そこで茶寿会では、『農家へ嫁ぐ若い女性が少ない』という農業における切実な問題の解決と観光業とを結びつけて、この問題に対応しようと考えている。

茶寿会のアイデアは「大野岳近辺に個人旅行者が来ても対応できるよう、茶畑に隣接した茶店販売所を設置してそこに労働者として茶農家の若いお嫁さんを従事させることにより、観光客への対応やお茶の販売、各種情報発信が可能となる」というものである。しかし、このアイデアは効果大とは思われるものの、資金面や施設の運営方法など、クリアしなければならない課題も多い。

２．専担の事務局設置

頴娃おこそ会には専担の事務局がない。専従の事務職員を複数抱えているNPOもあるが、おこそ会では理事長が代表を務める旅館・いせえび荘の従業員が、本業の合間に会の事務を兼務している。おこそ会のまちおこしに関するアイデアはプロジェクト制となっているが、プロジェクトが始動すると、その担当チームは事務面を含む全てについて責任を待たなければならず、その負担感からメンバーが今後、新たなアイデアを出すことに尻込みするようになると本末転倒となる。専従事務職員を雇えば次の展開にも進みやすくなるが、その経費をどうやって捻出するのかが大きな問題となる。

そこで、おこそ会では来春より「頴娃版観光DMO※」を立ち上げて、専任のスタッフを配置できるよう、県に対して働きかけを始めている。

※DMO（Destination Marketing/Management Organization）：欧米で発展した地域を基盤とする観光まちづくり組織。

３．地域雇用の創出

おこそ会活動の真の目的は、地域の人口減と少子高齢化への対策として、自分達の活動で人を雇用できるのか、頴娃町で何人の雇用を増やすことができるのかにある。しかしながら、観光関連商品の製造販売などこれからの部分も多く、まずは、観光によるまちおこしの流れを頴娃町全体に行き届かせて地域が魅力ある町となり、人口増など結果がついてくることを期待している状況にある。

おわりに

通常のまちおこしでは、１つのまちおこし団体が単体で地域をどんどん引っ張っていくパターンが多い。ところがこのNPO法人頴娃おこそ会は、自らもアイデアを出して行動しながら、各地域のことはその住民やまちおこし組織などに当事者意識を持たせて委ねており、皆で町全体を盛り上げるという『地域総力戦』の手法をとっている。まちおこしでこのような手法は珍しく、各地からの視察も相次ぐなか、地元・頴娃町の人々をはじめ南九州市や鹿児島県、国も認めるところとなった。

通過地点に過ぎなかった町・頴娃町を、人々が注目し行ってみようと思わせる地に変貌させた頴娃おこそ会の活動は、目標である新たな地域雇用の創出に向けてこれからが本番となろう。おこそ会の活動が、今後もこれまでのように皆の知恵を結集しながら地域全体で目標に向かって前進し続けることを願ってやまない。

（杉本　士郎）